

辞書ではわからない副詞の語彙的意味の記述：「 ぜひ」「どうか」について

著者	坂口 和寛
雑誌名	東北大学文学部日本語学科論集
巻	5
ページ	37-48
発行年	1995-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/33520

辞書ではわからない副詞の語彙的意味の記述

－「ぜひ」「どうか」について－

坂口 和寛

キーワード 働きかけ文 「ぜひ」「どうか」 待ち望み 懇願

要 旨 働きかけ文に現れる副詞に「ぜひ」と「どうか」がある。両者は類語とされるが、その相違についての記述は不十分であり、働きかけ文とのあいだに生じる形式上の特徴についても妥当な説明がなされていない。本論では両副詞の語彙的意味をより詳しく記述し、形式上の特徴の原因や両副詞の相違を検討する。「ぜひ」は話し手の希望的心情、「どうか」は話し手の要求態度という働きかけ文の異なった意味的側面に焦点を当てる副詞である。

1. はじめに

従来、副詞は様々な観点から研究されており、なかでも「陳述副詞」については「呼応」と呼ばれる現象が注目されてきた。呼応現象を持つ副詞は様々だが、そのなかに「ぜひ」と「どうか」がある。「ぜひ」と「どうか」は、聞き手にある行為や事態の実現を要求するような「働きかけ文」¹⁾とともに用いられる。本論では「働きかけ文」を“要求事態実現のため、話し手が聞き手に行動することを求める文”のこととし、また、働きかけ文の機能を大きく①命令機能、②依頼機能、③勧め機能の3つに分類する。この3機能は連続性を持つもので、「話し手の強制力の強さ」という点から分けることとする。

『使い方の分かる類語例解辞典』(1994、小学館)は、「ぜひ」と「どうか」を類語として扱っている。そして、両者に共通した意味を「相手に対して自分の希望を述べる」と説明している(以下の例は『使い方の分かる類語例解辞典』による)。

(1) ぜひ教えてください。²⁾

(2) どうかお願い致します。

また、両副詞と働きかけ文の文末言語形式との共起関係については、これまでいくつかの特徴が指摘されている。しかし、働きかけ文の言語形式は様々で

あるため、共起関係についての記述は不十分である。また、副詞の現れなどの統語的特徴を引き起こす要因についてもこれまで十分説明されていない。具体的な問題は第3節以降で詳しく扱うが、そのような問題を解決するためには、これまでの「ぜひ」や「どうか」の記述では不十分であり、両副詞の現れに関わる要因を明らかにする必要がある。

そこで本論では、「働きかけ文」との共起関係などの統語的特徴を手がかりに、「ぜひ」「どうか」の現れに関わる要因を探る。そして、両者の使い分けや統語的側面に反映する語彙的意味を整理しなおすことを目的とする。

2. 「ぜひ」と「どうか」に関する先行研究

まず、「ぜひ」と「どうか」に関する先行研究を概観する。

森本（1994）はいわゆる「命令文」と共起する副詞に「ぜひ」「どうか」「どうぞ」を挙げ、命令文の「発語内力（illocutionary force）」³⁾の相違と文体の相違の2点から3副詞の現れ方を分析している。「ぜひ」と「どうか」に関してはまとめると以下ようになる。

表1 「ぜひ」「どうか」と発語内力・文体との関係

	発語内力 (illocutionary force)			
	[order]		[request]	
	丁寧体	普通体	丁寧体	普通体
ぜひ	○	○	○	○
どうか	×	×	○	○

「ぜひ」は「命令文」の機能と無関係に現れ、また文体の相違にも影響されない。つまり「話し手・聞き手間の力関係（authority relationship）」に「ぜひ」は限定されない。また森本は「ぜひ」が現れる文脈を2つ挙げている。

- ①話し手は、要求に対する聞き手の受諾が文脈上の理由から当然のものと想定しない、あるいは想定できない。[場面に関わるもの]

②要求される行為は聞き手にとって利益となる。または行為の遂行が聞き手の親切に委ねられている。[話し手・聞き手の関係に関わるもの]

以上の文脈で、「ぜひ」は聞き手の応諾を望む話し手の希望・気持ちを強調する。つまり要求行為の実現が必ずしも容易でない状況で、話し手は「ぜひ」を用い、聞き手との衝突を避けつつ、強制せず聞き手に要求行為をする気持ちにさせようとする。「ぜひ」は付加的で丁寧な手段であるといえる。

森本はまた、「どうか」の特徴を「話し手を利すること、聞き手に話し手の行動を支配する力のないこと、聞き手の行為への依存」⁹⁾として「どうか」の機能が「begging」であると分析している⁹⁾。また「話し手が自分ではそこでは何もできず、聞き手の決定に全面的に依存するような状況」で「どうか」が自然に使えと説明し、以下の文脈を最も典型的なものとしている。

(3) (強盗に) なんでも差し上げますから、どうか命だけは助けてください。

(4) P: どうか怒らないでください。

Q: そんなこと無理です。

森田(1989)によると、「ぜひ」は「是が非でも、つまり良くても悪くても必ず、の気持ち」を表し、依頼・希望・願望等の表現を伴う。また、「どうか」については「無理難題を承知で、そこをなんとかと頼む気持ち」が強く「自己のために、あるプラスの状況が実現することを希望する」ものとする。

工藤(1982)によれば「ぜひ」は「願望当為的な叙法」に関わる「叙法副詞」で、その意味特徴は「実現の必要性の強め」である。そして、「実現の必要性」を含意する言語形式と呼応する⁹⁾。

森本(1990)は工藤の分析を発展させ、文法的、意味論的、語用論的レベルで「ぜひ」を分析・記述している。そして、文法的観点から「ぜひ」が出現する統辞論的環境を次のように説明している。

①意志・希望・当為・義務等を表す平叙文のタイプには現れるが、単に出来事を述べた文には現れない。

②疑問文には「ぜひ」は現れない。

③命令文ではたいていの文に現れる。

以上より「何かが実現されることへの要求あるいは期待ともいうべきものを含意」する文に「ぜひ」が現れ、要求・期待を強めると森本は説明する。

3. 先行研究で解決されていない問題

前節で概観した「ぜひ」「どうか」に関する研究では十分に説明されていない問題もあり、両副詞の全体像が十分把握されないでいる。本節ではそれらの問題に触れ、そこから両副詞の語彙的意味をより詳細に分析する。

3. 1 疑問文と「ぜひ」

森本(1990)は「ぜひ」が疑問文に現れないことを指摘している。しかし「ぜひ」が疑問文に現れることがあり、必ずしも現れないわけではない。

(5) 今度の日曜日、私もぜひ一緒に連れて行ってくれませんか。

(6) ぼく、あなたのファンなんです。ぜひ握手していただけませんか。

この疑問文は「間接発話行為」と呼ばれるもので、ここでは依頼の発話意図を直接的に表さない形式を用い、文脈の力を借りて依頼を行う。つまり、「事態の実現に対する要求・期待」(森本、1990)を含意している疑問文では「ぜひ」が現れ得る。

ところが、疑問文による間接的な働きかけ文でも、(7)や(8)のように聞き手に能力・可能性を尋ねる疑問文を用いた場合は「ぜひ」が現れない。

(7) *このワインのコルク欠けちゃったんだけど、ぜひ開けられる？

(8) *来週の授業、ぜひ発表できませんか。

(7)と(8)の疑問文に「ぜひ」が現れないのは、事態実現への話し手の要求・期待といった「待ち望み」(仁田、1991)が表されていないためである。

また、(5)と(6)には「～てもらう／～てくれる」といった聞き手の存在を必要とする形式が含まれており、聞き手への働きかけ性が明らかである。よって、事態実現への期待も表される。それに対して(7)と(8)は、表面上、単に能力の有無を尋ねているだけである。同様に、以下の例でも「ぜひ」が現れない。

(9) *今度の結婚式での祝辞、ぜひお願いしていいでしょうか？

(10) * ぜひ口裏だけ合わせて頂ければ結構です。

以上のことは、働きかけ文の「間接性」と無関係ではないだろう。働きかけ文の間接性の程度により、「待ち望み」を表す程度も変わる。具体的には、間接性が高いと文脈依存度が強く、聞き手の推測がより必要になる。間接性が高い働きかけ文には「ぜひ」が現れにくい。

3. 2 否定的働きかけ文と「ぜひ」「どうか」

森本(1994)が指摘するように、「ぜひ」は否定を表す言語形式と共起しない。例えば、否定依頼を表す否定的働きかけ文には「ぜひ」が現れない。

(11) * ぜひ誰にも言わないでください。

(12) * ぜひ私を一人にしないでちょうだい。

同様に、話し手の希望・願望を表す平叙文や、疑問文による間接的働きかけ文でも、否定的な場合は「ぜひ」が現れない。しかし、なぜ「ぜひ」が否定形式と共起できないのかについては十分説明されていない。

(13) * 僕にはぜひ隠しごとをしないでほしい。

(14) * 別れたわけはぜひ聞かないでくれますか。

この問題については、否定的働きかけ文の意味を考える必要がある。仁田(1991)は否定依頼について、「依頼そのものが、否定され打ち消される」のではなく「相手の、否定事態の引き起こしへの意志・好意の発動が依頼」されるものだとして説明している。つまり話し手は「動きが実現しないこと」を聞き手に依頼し、(15)では「逃がさない」という“事態の非実現”を要求している。

(15) 「とにかく、逃がさないでくれ。」[仁田(1991): p.233]

このことは、話し手の希望の述べる平叙文や疑問文による間接的働きかけ文の場合でも同様で、(13)と(14)では、ある事態が実現しないことを話し手が望んでいたり、聞き手に働きかけている。

以上のような否定的働きかけ文に対し、「ぜひ」は事態実現への「待ち望み」を表す。つまり、「ぜひ」は、要求事態が実際に実現され、具体的に現実世界に出現することを求める。このように“実現”に対する待ち望みを「ぜひ」が表すため、事態の“非実現”を要求する否定的働きかけ文には現れない。

否定形式との共起が制限される「ぜひ」に対し、「どうか」は否定的働きかけ文でも制限されず自由に現れる。

(16) どうか嘘だけはつかないでください。

(17) どうか私を一人にしないでほしい。

(18) この件に関しては、どうか口外しないでいただけますか。

「どうか」が否定的働きかけ文で自由に現れるのは、聞き手に対する話し手の要求態度に焦点を当てているためである。「どうか」は「懇願」しているという

要求態度を言語化したものであり、話し手の心情ではなく、むしろ聞き手への要求の仕方に焦点を当てる。要求態度は“どのように聞き手に要求するか”ということが問題となり、要求事態の実現・非実現には関係がない。そのため、「どうか」が否定的働きかけ文にも現れることができるのである。

なお、「ぜひ」は「待ち望み」という話し手の心情的部分に焦点を当てる。その意味で、「ぜひ」は働きかけ文の意味の中でも、最も基底にある話し手の希望的・要求的心情を言語化したものである。このような両副詞の焦点の違いが、否定的働きかけ文での現れの違いに影響していると考えられる。

以上のような両副詞の焦点の相違は、話し手の希望を述べる平叙文での現れに反映する。「ぜひ」は問題なく現れる（森本、1990）が、「どうか」の現れはいくぶん複雑な様相を見せる。

(19) しげよさんの作った料理、ぜひ食べてみたい。

(20) ぜひ君にも見てほしい。

(21) この仕事、誰かにぜひ手伝ってもらいたい。

(22) * どうか君と結婚したい。

(23) 今度の試合には、どうか君にも出てほしい。

(24) 融資の件、どうか銀行に便宜を図ってもらいたい。

(22) の「どうか」が不自然であるのに対し (23) と (24) は自然である。(23) と (24) は他者による事態実現を望んでいるのに対し、(22) は単に話し手の希望を表しているにすぎない。この点が「どうか」の現れに影響しているようである。つまり、「懇願」という意味を表すには、聞き手の存在が必要となるのである。なお、「どうか」が制限されるのに対し、「ぜひ」は「待ち望み」があれば現れることができる。

「ぜひ」と「どうか」が働きかけ文の異なる側面に焦点を当てていることは、(25) を見ると顕著である。一つの働きかけ文で両副詞が同時に現れるのは、両副詞の意味内容、焦点が異なる証拠である。

(25) 例の件、どうか ぜひよろしくお願いしますよ。

3. 3 無意志的行為への願望と「ぜひ」「どうか」

森田（1989）は「ぜひ」の特徴の一つに、「自己または他人に対する意志的な行為・状態の願望で、無意志的な場合に使うと不自然になる」ことを挙げる。

(26) 今年の冬はぜひ雪が降ってほしい。[森田(1989): p.587]

しかし、なぜ「ぜひ」が無意志的行為への願望・希望について言及できないのかについては詳しい記述がなされていない。

自然現象に対して要求する(26)に比べると、神様に要求するような(27)での「ぜひ」のほうがやや自然に感じる。とはいえ、(28)のように「どうか」を用いるほうが自然である。また、同じく(26)も(29)のように、「ぜひ」ではなく「どうか」のほうが自然である。

(27) ?神様、ぜひ私に素敵な男性と巡り会わせてください。

(28) 神様、どうか私に素敵な男性と巡り会わせてください。

(29) 今年の冬はどうか雪が降ってほしい。

『使い方の分かる類語例解辞典』によれば、「どうか」は事態実現の困難な状況が全く想定されないときには使えず、「困難なことはわかっているが、そこをどうか、の意」を表す。

先の例では、事態実現を要求する相手が「人間」ではなく、「自然」や「神」といった存在である。このような場合、話し手の要求が通って事態が実現する可能性は小さい。要求事態が実現することもあるが、話し手がコントロールできるものではなく、実現は偶然の賜である。

真に自分の要求が通るような聞き手ではなく、ある意味では事態実現を求めても無駄な場合は、事態“実現”への待ち望みを表す「ぜひ」の現れは制限される。これに対して、「どうか」は聞き手が人間以外の特殊な場合でも現れる。「どうか」の「懇願」という意味は、要求事態実現の可能性が低い場合や聞き手が要求を聞き入れないような存在の場合での働きかけに適する。また「どうか」は要求態度を表すため、どのような聞き手かということには無頓着なのである。

以上のように、自分の希望・願望をかなえてくれる聞き手であるか否かが、「ぜひ」と「どうか」の語彙的意味と関わり、その現れに影響するわけである。

3. 4 働きかけ文の各機能と「ぜひ」「どうか」

「ぜひ」「どうか」は働きかけ文の機能により現れ方が異なる。これには各機能の意味的特徴と副詞の語彙的意味が関わっている。

命令機能の働きかけ文は強制力が強く、聞き手の選択自由度が低い。命令は事態実現の確率が非常に高いため、「ぜひ」により「実現の必要性」を強めて事

態実現を図る必要がない。また、「どうか」も命令機能の働きかけ文には現れないが、これは「懇願」という意味が命令では表せないからである。

(30) * ぜひひとの話を聞け。

(31) * どうか静かにしなさい！

依頼機能の働きかけ文では「ぜひ」「どうか」が共に現れやすい。依頼では話し手が聞き手より比較的弱い立場にあり、要求事態を“聞き手にさせる”のではなく“お願い”し、“聞き手にしてもらう”。依頼機能は話し手の強制力が弱く、選択自由度が高い。これにより事態が実現しない危険性が高いので、「ぜひ」で事態実現の必要性を強め、話し手の「待ち望み」を前面に押し出す必要が生じる。そのために「ぜひ」を使用することが多くなる。

(32) その秘蔵のフィルムをぜひ私に見せてください。

(33) 今度の接待の準備なんだけど、ぜひ数日中に頼むよ。

「ぜひ」と同様に、「どうか」もまた依頼機能の働きかけ文と相性がよい。これは、「懇願」の意味合いを最も表しやすいのが依頼機能だからである。

(34) 彼女の居場所を、どうか教えてください。

(35) これから話すことは、どうか内密にお願いします。

最後に勧め機能の働きかけ文だが、単に「勧め」といっても様々なタイプがあり、用いられる言語形式もそれに応じて様々である⁹⁾。全体的に「ぜひ」は勧め機能の働きかけ文でも現れるが「どうか」は現れない。

(36) ～ (38) は“提案”に近い勧めである。話し手は要求事態の必要性を認識しているが、事態実現は聞き手に委ねており、強制力がほとんどない。ときには、話し手が好ましく思わない事態を聞き手に勧め得る。この点で「ぜひ」が現れにくくなる。特に (38) は多少話し手の投げやりな態度が感じられる。

(36) これ、おいしいよ。* ぜひ食べてみたら。

(37) ??今度の連休、ぜひ海外旅行でもなさったらいかがですか。

(38) * ぜひ本人に直接会ってみればいいじゃないか。

以下は当為判断を表す形式を用いているが、話し手が事態実現の必要性を認めたうえで聞き手に勧めているため、「ぜひ」が現れる。

(39) 統計を勉強するなら、ぜひこの本を読んでおいたほうがいい。

(40) ぜひこの新しい器具で実験するといい。

(41) いじめにはぜひ真正面から取り組むことが必要だよ。

また、(42)～(44)は本来命令や依頼の形式だが、勧めを表す場合は「ぜひ」が現れる⁹⁾。これは、話し手が事態の必要性を認めて実現を要求しているためである。なお、(45)と(46)のように否定的な勧めには「ぜひ」が現れない。

(42) 困ったことがあったら、ぜひ相談しに来なさい。

(43) この新製品の清涼飲料、ぜひお飲みください。

(44) 遠慮しないで、これからもぜひ来てください。

(45) *ぜひ無理をしないほうがいい。

(46) *ぜひ自分勝手な行動をしないことだ。

「ぜひ」とは異なり、「どうか」は勧め機能の働きかけ文には現れない。勧め機能の性質上「懇願」を表せず、「どうか」の現れる余地がないためである。

(47) *寒いんだったら、どうかその上にセーターを着たら。

(48) *あわてないでどうかゆっくり考えたほうがいい。

(49) *高校を卒業したら、一度はどうか外国を旅しなさい。

以上、「ぜひ」は依頼・勧め機能の働きかけ文に現れるが、「どうか」は依頼機能の働きかけ文にしか現れない。命令機能では両副詞が共に現れない。勧め機能に「ぜひ」しか現れないのは、「ぜひ」が事態実現への「待ち望み」を表すためである。依頼であれ勧めであれ、話し手が働きかけ文で要求する事態を必要なものとし、強く望んでいるという事実があれば「ぜひ」が現れる。

3. 5 要求事態実現による利益と「ぜひ」「どうか」

森本(1990)は「ぜひ」の使用条件に「利益」を挙げている。それによれば、「ぜひ」は「聞き手にとって、利益になる行為が求められているときにつくか、あるいは、話し手にとって利益になることであっても、聞き手の行為にすぎることによって実現する場合」に現れる。森本は、話し手の利益になる例を挙げている。

(50) 甲：彼女の住所も要りますか。

乙：ええ、ぜひ教えてください。[森本(1990):p.97]

森本は話し手乙の利益になる行為が求められているとしつつ、乙の発話について「聞き手が好意的にその行為をしてくれるだろうという期待がある。つまり、聞き手の好意にすぎろうという態度の方が強くでている」と説明する。しかし、「聞き手の好意にすぎろうという態度」と利益は関係がないように思われ、この説明では「ぜひ」と利益との関係が明らかにならない。むしろ利益は

「ぜひ」の現れを制限するほどのものではないと思われる。

また「利益」には話し手の利益、聞き手の利益、そして第3者の利益が考えられるが、森本の分析では特に第3者に利益が及ぶときに「ぜひ」が現れる場合を説明できない。

(51) 面白そうな話ですね。ぜひ私にも聞かせてください。(利益：話し手)

(52) この料理おいしいよ。ぜひおひとつ食べてください。(利益：聞き手)

(53) 彼の左遷はあんまりです。ぜひ再考をお願いします。(利益：第3者)

「ぜひ」の使用にとって、事態実現が誰の利益になるかということはあまり重要ではない。「ぜひ」は利益に関わらず、むしろ“事態の実現”を望む話し手の気持ちを表すものとしたほうが、「ぜひ」の現れを統一的に説明できる。

「どうか」については、要求事態実現により話し手に利益が及ぶことを森田(1989)と森本(1994)が指摘している。森本は(54)から、要求事態が「応じられれば、話し手にとって得なことになる」ものと説明している。

(54) P：どうか窓をあけてください。わたしは暑くて死にそうです。

[森本(1994：p.158)]

森本が指摘しているのは、事態実現それ自体が直接的に話し手の利益になる場合のようである。しかし、(55)と(56)では利益が話し手以外の第3者に及ぶが「どうか」は現れることができる。(55)と(56)では直接的に利益を受けるのは話し手以外の第3者であり、具体的にはそれぞれ「聡子」「あの人」である。

(55) すみませんが、どうか聡子さんの相談にのってやってください。

(56) あの人のために、どうか私にやらせてください。

とはいえ、話し手に全く利益が及ばないわけではない。上の2つの例で、第3者が直接的に受ける利益を「一次的利益」とすると、話し手は間接的に利益を受けていると考えられ、これを「二次的利益」とする。(55)では“自分は聡子の相談にのらなくともよくなり、手間がかからない”などの利益が、(56)では“あの人の役に立つことで、精神的満足を得られる”などの利益が「二次的利益」となる。「利益」については2種類の利益を考慮することが必要であり、それにより「どうか」の記述もより十分なものとなるだろう。

4. まとめと今後の課題

以上、働きかけ文における「ぜひ」「どうか」の統語的特徴を見てきた。そし

て、そこから統語的特徴に関わる「ぜひ」「どうか」の意味を分析した。本論での「ぜひ」と「どうか」の分析をまとめると以下のようなになる。

「ぜひ」：ある事態が実際に“実現すること”に対する話し手の「待ち望み」を表す。そのため、否定的働きかけ文には現れない。話し手の要求・希望的心情部分に焦点を当てるため、働きかけ文だけでなく願望を表す平叙文にも現れる。また、依頼機能だけでなく勧め機能にも現れる。

「どうか」：聞き手に対する働きかけが「懇願」の意味を持つことを表す。「ぜひ」のように話し手の希望的心情部分ではなく、むしろ話し手の要求態度に焦点を当てる。そのため、働きかけ文の肯定・否定といった差には制限されない。また、「懇願」という意味を表すことから依頼機能の働きかけ文にしか現れない。

本論では、主に統語的観点から両副詞の意味的問題を明らかにしようとした。しかし、より幅広く「ぜひ」と「どうか」を調べるなら、森本（1990）のように語用論的観点からの分析も必要である。ただ、意味的問題と語用的問題の両者をどこで分けるかという難しい問題もある。また、働きかけ文に現れる他の副詞との関係や、多種多様な働きかけ文の言語形式の整理など、考慮すべき問題がまだある。以上のような点を今後の課題としたい。

注

- 1) 仁田（1991）における「働きかけ」という名称を借用した。
- 2) 例文は、特に注がない限り坂口の作例である。なお、例文の正誤判定については数名の日本人に確認した。
- 3) 森本は具体的に説明していないが、「発語内力（illocutionary force）」とは Austin（1962）による概念である。具体的には、ある発話が聞き手にどのようなものとして受け取られるかということであり、要請や指図、命令などが挙げられる。例えば、「今ちょっとお金がないんだ」という発話は、発語内力として「金を貸してほしい」という聞き手への要請であると考えることができる。
- 4) すぐ後の「どうか」が自然に使える状況を考えると、この箇所は誤りであると思われる。正しくは、「話し手に聞き手の行動を支配する力がない」であろう。
- 5) 森本によれば、「begging」とは「話し手が、自分の要求についての聞き手の気持ちを考慮していない」という特徴を持ち、「聞き手に応じる意志のあるなしにかかわらず聞き手に好意をもとめる」ものである。
- 6) 工藤は「ぜひ」と共に用いられる文末表現形式に次のような形式を挙げている。

〔依頼〕：してください

〔命令〕：しろ

〔勧誘・意志〕：しよう、する；するつもりだ

〔希求〕：してほしい、してもらいたい

[希望]: したい

[当為]: しなければならない、するといい、必要だ

7) 「ぜひ」は待遇性を持っており、これが命令機能と反発することも考えられる。命令では話し手が聞き手の負担をあまり考慮せず、聞き手への配慮が小さいことが「ぜひ」と反発するために、使用が制限されるとも考えられる。

8) 勧め機能の働きかけ文で用いられる言語形式は、命令や依頼機能に比べると整理が十分であるとはいえない。田中(1981)は「勧誘表現」について、現代語での勧誘表現には終助詞「たら」以外に独自の表現形式がないとし、文表現の類型としては「適当か否かの判断を述べた、平叙文あるいは推量表現」と見るべきだと説明する。勧め機能の働きかけ文での言語形式についての詳しい整理は今後の課題である。

9) 働きかけ文の丁寧さが低いために「ぜひ」の現れが不自然になるとも考えられる。以下の例は勧めであるけれども、やや丁寧さに欠ける勧め表現である。

例: ?悩みごとがあるなら、ぜひオレに相談しろ。/?この缶切りはすごいよ。ぜひ使ってみな。

また、以下2つの勧め機能の働きかけ文では「ぜひ」の使用に差が感じられる。「ぜひ」は後続の言語形式に丁寧さを要求する副詞であることも考えられる。

例: ?体調がもとに戻るまでぜひ休め。/体調がもとに戻るまでぜひ休みなさい。

参考文献

- Austin, J.L (1962) How to do things with words. Oxford University Press. (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978)
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能－その記述方法をもとめて－」『国立国語研究所報告 71 研究報告集 3』
- 森本順子(1990)「副詞『ぜひ』について」『日本語学』vol.9、1月号 明治書院
- 森本順子(1994)『日本語研究叢書 7 話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- 坂口和寛(1995)「働きかけ文における副詞と文末形式との呼応現象に関する研究」平成6年度 東北大学修士論文
- 田中章夫(1981)「文表現の類型」北原保雄編『日本文法事典』有精堂
- 田中敏夫(1983)「否定述語・不確定述語の作用面と対象面－陳述副詞の呼応の内実を求めて－」『日本語学』Vol.2、10月号 明治書院